

宮内官僚

森  
林  
太  
郎

第十三回  
(最終回)

石見人として死せんと欲す

野口 武則

帰らなかった津和野の地

大正十一(一九二二)年七月九日に病没した鷗外は、その三日前、親友の賀古鶴所に遺言を書き取らせた。宮内省、陸軍の栄典を拒否すると記した理由は、既に取り上げた。最後に残る謎は「余は石見人いわたのひと森林太郎として死せんと欲す」の意味である。

森家は石見の国・津和野藩(現在の島根県津和野町)の藩主亀井家に仕える典医だった。だが、鷗外は明治五(一

八七二)年、父・静男に従い十歳で上京して以来、一度も津和野の地に帰ることはなかった。津和野が登場する鷗外の作品は僅かだ。にもかかわらず、なぜ最後は「石見人」として死に臨んだのか。その意味を考えるため、最終回は官僚・鷗外の生涯を簡単に振り返りたい。

『舞姫』で描かれた国費留学生

明治二十三(一八九〇)年一月、二十八歳になる鷗外が初めて発表した小説『舞姫』は、ドイツ留学から帰国途上

の若い官僚が、ドイツで交際した女性・エリスとの別れを回想する手記である。主人公・太田豊太郎おほたにゆたろうのモデルは、鷗外が留学先のドイツで出会った別の軍医とされるが、鷗外の実体験と重なる部分も多い。豊太郎を通じ、自身の心境を小説の形を借りて表現したと言える。

現地で過ごすうち新たな価値観に触れ、自由な精神とエリスとの恋愛を手に入れたのもつかの間、豊太郎は国家から逃れられない運命にあった。近代国家建設を担うことが期待された国費留学生は、国家と運命を共にすることが要請された。

「嗚呼、あゝあ 独逸ドイツに来し初はじめてに、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。曩さきにこれを繰あやつりしは、我某省の官長にて、今はこの糸、あなあはれ、天方伯あまはくの手中に在り」

天方伯は当時伯爵だった山県有朋、官長は上官の石黒忠憲、天方伯と豊太郎を取り持つ友人の相沢謙吉は賀古と重なる。芽生え始めた自由の精神も確固たるものではなく、天方伯に従わずドイツに残ればどうなるか。不安がこう記される。

「本国をも失ひ、名譽を挽きかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる歐洲大都の人の海に葬られんかと思ふ念、

心頭を衝つて起れり」

日本という後ろ盾も、官僚としての名譽も失えば、個人として残るものがあるのか。エリスとの愛に生きたとしても、広々として果てしない大都会に集まる「群衆」の一人として埋もれるだけだ。根無し草の人間となりかねない自己喪失感、実在的な不安を言い表している。豊太郎は自らの意思にかかわらず、時代や社会の要請として、再び国家に仕える道を選ばざるを得なかった。

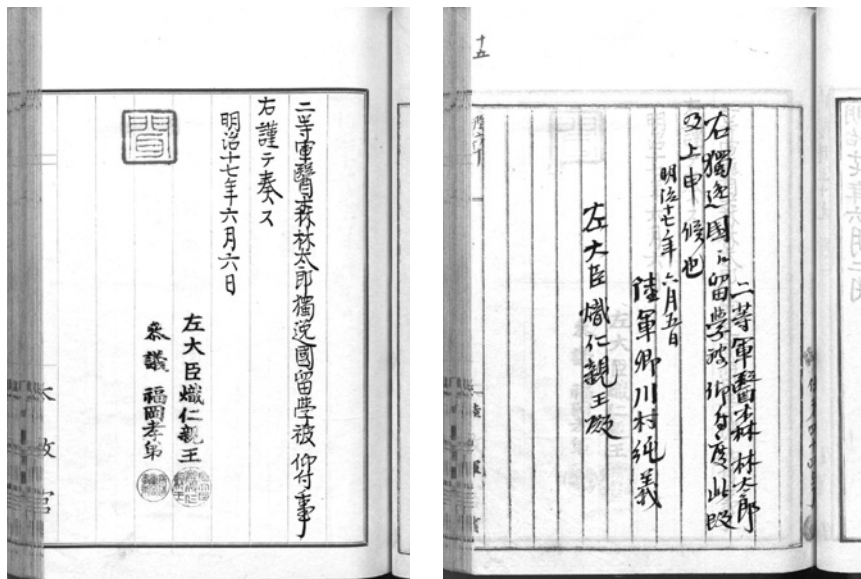
ただ、物語はこう締めくくられる。

「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろは今日までも残りけり」

## エリーゼとの別れ

実際の鷗外もドイツで交際した女性と別れ、官僚として生きていくことになる。

留学を終えた鷗外が横浜に帰港してから四日後の明治二十一年（一八八八）年九月十二日、この女性が横浜港に到着した。『舞姫』で豊太郎の恋人だったエリスのモデルとされるが、鷗外の日記や書簡に彼女の名前や素性は記されていない。多くの研究者らがエリス探索を長年続けて来たが、ドイツ在住の作家・六草むくそういちか氏によって特定された（六草『鷗外の恋 舞姫エリスの真実』講談社、二〇一一年）。



鷗外のドイツ留学に関する陸軍卿から左大臣への上申書(右)と天皇への上奏文(左)  
=国立公文書館のデジタルアーカイブより

ベルリンの州公文書館や教会公文書館に残る当時の文書を調査した結果、一八六六年に現ポーランド領のシユチエチン生まれのエリーゼ・マリー・カロリーネ・ヴィーゲルトと判明した。

エリーゼは一カ月間、東京の築地精養軒ホテルに滞在した。その間、鷗外の家族は結婚を断念するよう説得を続けた。鷗外は十月十四日、賀古に書簡を送った。エリーゼに関して鷗外が残した唯一の記録である。

「かのけん彼件は左顧右盼(左右を見回したためらうこと)に違なく断行つかまつり仕候(中略)其源そのみなもとの清からざることゆえ「故どちらにも満足致候いんしやうほうよう様には収まり難く、其間軽重する所は明白にて人に議るはか迄も無御座候ござなくさうろう」

家族や周囲の反対に遭い、「遂にエリーゼと別れることを決心し、それを賀古に伝えた手紙」(山崎国紀「森鷗外の手紙」とされる。その三日後、エリーゼは横浜港から帰国し、鷗外は埠頭から見送った。

結局、鷗外はエリーゼとの愛を捨て、海軍中将で男爵の赤松則良の長女・としこと結婚する。鷗外の帰国前から森家と赤松家で縁談を進めており、その道筋に乗らざるを得なかった。

『舞姫』には登場しないが、鷗外は留学出発前の明治十七(一八八四)年七月二十八日と、帰国後の明治二十一年九月二十七日、明治天皇に拝謁している。国家が国費留学

生にかけると期待の表れだ。鷗外の自筆年譜『自紀材料』と、天皇の正史『明治天皇紀』に記される。しかも、帰国後の拝謁は、エリーゼが日本滞在中のことだ。エリーゼと国家の狭間で煩悶としていたドイツからの帰途、漢文の日記『還東日乗』に記した明治二十一年八月九日作の漢詩で「何を以てか天恩に報いん」と詠じている。「天皇の官吏」という意識を拭い去ることができず、拝謁を終えた以上、もはや逃れられない運命だったに違いない。

『舞姫』で太田豊太郎という創作の人物を通じて国費留学生の苦悩が描かれたが、実際の鷗外も留学で得た自由の精神は捨てがたかったはずだ。エリーゼとの結婚を断念せざるを得ない状況に追い込んだ国家、官僚機構に対し、「一点の憎むこゝろ」も残したことだろう。

### 昼と夜の二重生活

官として生きることになった鷗外だが、自由の精神との二律背反をどう解消すればよいのか。それを昇華させる作業が文筆業だった。鷗外研究者の山崎一穎氏は「鷗外にとつて表現することは、己を客観化し、組織から個を奪い返し、浄化する行為であった」（鷗外にとつて表現することの意味——序に代えて）『森鷗外論攷定』所収）と指摘する。

陸軍医として本格的に歩み始めた鷗外は、昼に公務、夜や休日にも文筆という二重生活を続けた。昼は私を捨てて国

家に尽くしつつ、夜の文筆で抑圧された鬱憤を解き放ち、精神を浄化させた。内面の自由を得るために必要なことだった。官僚にもかかわらず、小説を書いたのではない。官僚として生きるために、小説を書き続けなければならなかったのだ。

『舞姫』を書き上げ、個人と国家の間での葛藤や矛盾の均衡を保てるようになったことで、鷗外は天皇を中心とした国家に仕える「近代官僚Ⅱ近代日本人」になることができたといえる。業務に差し障ると上官から注意されても筆を折らなかつたのは、官僚・森林太郎のアイデンティティを保つために文学が必要だったからだろう。

当然の帰結として、小説には、自由を求めながら実現できなかつた後悔やエリーゼの影がちらつく。明治天皇の大喪当日に殉死した乃木希典に触発され歴史小説を書き始めた大正期は、組織と個人の関係を問うテーマがより強くなる。官僚組織の中でも最も規律が厳しい軍の内部で鷗外は生きた。個人との矛盾や対立が深まれば深まるほど、作品を通じての解放も大きくなる。

これに先立ち、自らの経験を書いた青年の性欲史を描いた『キタ・セクスアリス』（明治四十二年）は、過激な性描写や思想を描いていないにもかかわらず発禁とされ、石本新六陸軍次官から嚴重注意を受けた。現職の高級官僚の身で、社会や国家への批判や皮肉を現代小説の形で書くの

は差し障りがある。武家社会という歴史の舞台を借りることとで、官僚組織への批判を作品に込めることが可能となつたのだらう。

### 「官情の薄さを覚ゆ」

だが、年を経ると作品から権力批判の厳しさは影を潜め、静謐さが目立つようになる。大正四年七月十八日、鷗外は日記に「韶亂」と題する官僚としての半生を振り返る漢詩を記し、二十三日に書簡で賀古へ送った。七言律詩の後半四句を紹介する。

「醉裏の放言は 客の怒りに遭ひ

緒餘の小枝は 人に嚼はる

老来 殊に覚ゆ

柱に題せしは 頭を回らせば 彼も一時

酒の勢いにまかせて好き勝手なことを言つては、同席した人々の怒りを買ひ／本業のかたわら拙い作品をつづつては、他人のあざけりに遭うばかりだった。

老いるとともに、官務に対する熱意が薄れてゆくのを強く自覚するようになったが／ふりかえってみれば、野心にあふれていたあの当時はあの当方で、それが自分の偽らざる姿だったのである。」（※傍線は筆者）

五十三歳の鷗外は陸軍省医務局長として八年近く務め、

この年十一月に陸軍次官の大島健一に引退を申し出る。発令は翌大正五年四月十三日である。官僚が本務の鷗外にとって、文筆は「緒餘の小枝」に過ぎなかった。退官が迫る中、「官情薄」と心境が吐露される。立身出世の志は薄れ、官に対する未練もなくなった。昼の公務がなくなれば、夜の文筆にも変化が訪れる。

### 「史伝」で一体化した昼と夜

陸軍退官を契機に鷗外が取り組み始めたのが「史伝」である。「韶亂」の詩を作った翌月の大正四年八月から、江戸時代末期の弘前藩に仕えた侍医で儒学者、考証学者だった洪江抽斎の事績を調べ始める。大正五年一月から東京日日新聞で連載が始まり、連載中の四月に退官した。

鷗外研究者の山崎一穎氏は「洪江抽斎」の世界は〈型〉と〈修養〉を最高の善とする世界である」（『森鷗外 国家と作家の狭間で』新日本出版社、二〇一二年）と規定する。『洪江抽斎』では、抽斎が取り組んだ考証学について「修養の全からんことを欲するには、考証を闕くことは出来ぬと信じてゐる」（その五十六）、「道に至るには考証に由つて至るより外無いと信じたのである」（その五十七）と記される。つまり、テキストの考証を通じてしか古の教えを伝授することはできず、考証することは学者としての修養、すなわち「道」そのものである、という世界だ。

「抽斎らは幕府（公）によって生活が保証され、学問集団に参加する個は、校勘こうかんという為事を通して充実感を得する。個と組織が矛盾もつごんを来たさない。それ故、至福に生きた時代の父と、維新後その様に生き得ない子の時代相が見事に浮き彫りになる」（山崎「二十二 一身にして二生を生きた森鷗外」『森鷗外論攷 完』所収）

鷗外は陸軍を辞することで初めて文筆に専念できる環境に身を置き、昼の世界と夜の世界が一体化した。しかも、抽斎という敬慕する人物と巡り会い、描く対象と自身を重ね合わせる事ができた。鷗外自ら「わたくし」という一人称で著作に登場し、抽斎ゆかりの人や史跡を訪ね歩くという、これまでにないルポタージュ形式で書き進めた。史料に立脚した「史伝」への転換である。

組織や国家との間で葛藤もなくなり、創作により精神を浄化させる必要性も薄れた。虚構である小説という形式を取らなくとも、自己表現が可能となったのだ。それは鷗外にとっても「至福な世界」だった。

鷗外は大正六年十二月、再び官界に呼び戻されたが、宮内官僚として取り組んだ歴史編集事業は史伝の延長線上にあった。私と公の矛盾、まして若き日に抱いた「一点の憎むこゝろ」は霧散していた。国家の中心に位置する天皇の歴史を、史料に基づき確定してゆく作業は、江戸期の考証学者が実践した「修養」や「道」である。『空車』で暗示

した国家の「虚」を宮内官僚として埋め合わせる仕事は、これまで歩んできた空疎な官僚人生に新たな意味を吹き込み、堅実なものへと再構築する作業でもあった。宮内省での官僚としての第二の人生は、昼の公務と夜の執筆の世界が一体化したものだ。

しかし、そうした「為事」に情熱を傾けることができる至福な世界を崩したのが、宮内大臣・牧野伸顕による官制改革に伴うリストラであり、自らの事業を優先させて働きかけを強めた帝室制度審議会総裁・伊東巳代治の横やりだった。それが「官憲威力」に対する憤りとして遺言に記された。

### 「石見人」の真意

遺言で鷗外が一個人として死に赴きたいと書き残したのは、国家への憤りが前提となる。そして栄典辞退という形で国家を拒否した。「死は一切を打ち切る重大事件なり」と、生涯に渡り官僚として尽くしてきた国家と関わりを絶つと宣言し、「奈何なる官憲威力いんけんゑいりと雖いふまでもなく此に反抗する事を得ずと信ず」と、どのような国家権力であっても自らの死に関与をすることを拒んだ。その上で「石見人森林太郎として死せんと欲す」と、一切の肩書を捨てた一個人として死にたいと望んだ。「石見人」の対義語は、国家に尽くす「近代官僚＝近代日本人」ということであろう。つまり、「近代

日本人」として死ぬことを拒んだのだ。

十歳で上京した鷗外は、十九歳で東京大学医学部を卒業し、陸軍入省後に留学の機会を得た。『舞姫』の主人公・太田豊太郎の心境に沿えば、「我名を成さむ」という功名心、「我家を興さむ」という森家再興が先に立ったが、国家から逃れられない明治期の国費留学生の宿命に縛られた。主体的に選んだ道ではなかったが、国家に対し「一点の憎むこゝろ」を封印しながら官僚として生きる道が定まった時、「官僚・森林太郎」近代日本人」が誕生した。『舞姫』執筆がその起点となる。

遺言は「余は少年の時より老死に至るまで一切秘密無く交際したる友は賀古鶴所君なり」と書き出される。エリーゼとの恋を捨てるか否かで苦悶した若き日の鷗外の相談に乗り、官の道へと導いたのが賀古だった。ドイツの地で自由の風に当たり芽生え始めた自我を押し殺し、自由との決別という犠牲を払い、身を粉にして尽くした官僚人生である。だが、最後はその国家に裏切られた。そうした「秘密」を最もよく知るのが賀古だった。

では、「近代官僚」近代日本人」を捨て去った鷗外だが、回帰すべき「石見人」とは何を指すのか。津和野から比較的近距离にある福岡・小倉に勤務した時すら、故郷に立ち寄っていない。津和野という土地に愛着があるようには思えない。

『洪江抽斎』が鷗外の最高傑作の一つであるとの評は、石川淳『鷗外覚書』（三笠書房、一九四一年）以降、定着している。確固とした君臣関係を前提に、為すべき事に専念できた江戸時代後期の藩主仕えの医師や考証学者たちに、鷗外は自らを重ね合わせ、筆致が生き生きとしている。天皇を中心として急速に作り上げた近代日本人という虚構を捨て去った時、そこに残るのは、藩主に忠誠を尽くす前近代の武士の姿である。乃木希典の殉死で改めて自覚させられたものの、大正期にはかすかな残り香が漂うだけになっていた。

史伝で描いた世界に鷗外が接したのは、史料や伝聞からだけではない。父・静男は最後の津和野藩主・亀井家十二代目の茲監こゑみに侍する典医として仕えた。維新後に上京したのは亀井家の招きを受けたからで、東京・向島の旧亀井藩下屋敷（亀井家の別邸）に住み込んだ後、近所に移り住んだ。その後も交流は続き、明治十八（一八八五）年に茲監が保養先の静岡・熱海温泉で脳卒中を発症後に死去した際、静男は東京から駆けつけ看取っている。

鷗外の代になっても主従の親密なつながりは続いた。亀井家の家政に関しては津和野出身の有力者が相談を受けていたが、鷗外はその一人だった。十四代目茲常こゑつねが宮内省式部官に採用されたのは、鷗外が山県有朋にあっせんを頼んだからだ。賀古宛書簡で「はじめて旧主人家に対し報恩を



島根県津和野町の永明寺にある森家代々の墓所。中央奥が「森林太郎墓」

なしたるやうの心持いたし愉快に不堪候<sup>たえずそうろう</sup>」（明治四十二年十二月八日）と喜びを伝えた。

茲常に長男が生まれた二日後、鷗外の日記に「亀井伯茲常ぬしの長男を茲建と名づく。これたけなり」（明治四十四年六月二十三日条）と記される。十五代目の命名者となつたのだ。鷗外の日記を見ると、晩年まで年末年始のあいさつで東京・小石川の亀井宅を訪ねるのが恒例となつていた。

### 津和野・永明寺

鷗外が生まれた津和野は、亀井家四万三千石の城下町で、津和野川に沿つた山間の細長い平地に位置する。幼少時の鷗外が通つた藩校・養老館など古い町並みが保存され、「山陰の小京都」と称される。

「石見人」の手掛かりを探ろうと、筆者は津和野を訪ねた。まず向かったのは亀井家菩提所の永明寺だ。JR山口線の津和野駅から裏手の山の方面へ五分ほど歩く。坂道の上にある山門を抜けると、右手に茅葺き屋根の本堂が見える。森家代々の墓は、山門の左手の高台に二十基ほどたざずんでいた。中央奥に「森林太郎墓」がある。三鷹・禅林寺のものと同じ墓石を作り、没後三十一年の昭和二十八（一九五三）年七月九日、故郷の地に分骨した。ただし、鷗外の三男・類<sup>るい</sup>によると、実際は骨ではなく、禅林寺の墓地から土を分けたものだという（森類『鷗外の子供たち』あとに



残されたものの記録―』光文社、一九五六年)。

一方、亀井家代々の墓は永明寺の隣の乙雄山にある。一旦、山門を下りてから、「亀井家墓所」の矢印が書かれた掲示板に従い進む。麓の永太院の境内を抜けると、裏山へと山道が延びている。山道の途中に「西家墓所」とあるのは、鷗外の親類・西周にしあまねの父祖のものだ。石段を更に上ると鳥居をくぐり、鬱蒼とした木々の間を抜けて山の中腹まで歩くこと十分弱。今にも崩れそうな白塀の門を抜けると、平坦な地に出た。

参拝者がほとんどいないのか、足元には雑草が生い茂る。左右を見渡すと、墓石や石灯籠が立ち並ぶ幽寂な光景が広がっていた。戦国時代から江戸時代初期の初代このり茲矩以降、一族の墓石は約七十基に及ぶ。

ちなみに、茲矩は元々、戦国時代に山陰地方を治めた尼子氏の重臣だった。尼子氏が毛利氏に滅ぼされた後は羽柴秀吉(後に豊臣秀吉)、徳川家康に仕え、関ヶ原の戦いの後に因幡国・鹿野(いんぱの)(現在の鳥取市西部)藩主となった。茲矩の子・二代目政矩が津和野に封じられ、明治維新まで続いた。

平成期の約三十年間、一貫して元号選定事務を担い、令和改元直前に亡くなった「元号研究官」の尼子昭彦氏は、戦国大名・尼子氏の末裔だと同僚らに話していた。国立公文書館公文書研究官兼内閣事務官との肩書を持ち、鷗外や

吉田増蔵の系譜に連なる平成の漢学官僚だった。近代元号制度の確立に寄与した鷗外の旧主君をさかのぼると尼子氏にたどり着くのも、元号を巡る縁を感じる。

## 鷗外撰の石碑も

話を墓地に戻す。門の正面に初代茲矩、右手に二代目政矩の墓石があり、左手にそれ以後のものが続く。風化したり、苔むしたりして文字が読みにくいものが多いが、奥へ進むと「従四位勲二等伯爵亀井茲建之墓」とはつきり刻まれた墓石が目に入った。鷗外が命名した十五代目だ。平成四(一九九二)年に亡くなり、墓地の中で最も新しい。その二つ隣は十四代目の「従二位勲四等伯爵亀井茲常之墓」(昭和十七年没)。更に奥へ歩むと十三代目の「従三位勲四等伯爵亀井茲明之墓」(明治二十九年没)があり、最も奥まった場所に十二代目の「従二位勲三等亀井茲監墓」(明治十八年没)が位置する。その向かって右隣に「正二位亀井候碑」の石碑がある。茲監没後の大正十(一九二一)年、「従二位」から「正二位」へと官位が上った経緯と、生前の功績が漢文で刻まれ、文末に「正三位勲一等 森林太郎撰」と記される。十四代目茲常が鷗外に依頼して作らせた碑文だ。

筆者は乙雄山の墓所を歩き、二つのことに気付いた。一つは、墓石や石碑には、鷗外も含めて国から与えられた位

階が彫られていること。もう一つは、森家代々の墓と亀井家代々の墓の距離感だ。二つの家の墓につながりは感じられない。

乙雄山を下り、津和野の町を歩いた。夕刻で観光客の姿はほとんどない。津和野川沿いにある養老館まで来ると、白鷺が大きな羽を優雅に広げ、目の前に舞い降りてきた。門前の小さな広場には「鷺舞」の像が建つ。四〇〇年の歴史を持つ津和野の弥栄神社に伝わる神事で、国指定無形民俗文化財に指定されている。白鷺はその横を、細くて長い足を交差させながらゆっくり歩み、しばらくするとまた飛び立った。滞在中に津和野川周辺で鷺の姿を何度も見た。幼い鷺外も目にした光景である。

ただ、鷺外作品に登場する「鷺」には、暗い影がつきまとう。『舞姫』では、太田豊太郎がエリスを裏切り日本へ帰国せざるを得なくなる最後の山場で描かれる。厳冬の夜、煩悶とする豊太郎がようやく自宅前にたどり着いたところ、エリスの部屋の灯火を遮るのが「降りしきる鷺の如き雪片」だ。自由と愛に暗雲が立ちこめる様子を表現している。

『ル・バルナス・アンビュラン』（明治四十三年）と『雁』（同四十四年）では、田んぼの中を歩くような半ば自由を縛られた様子を「鷺のやうな」と記す。身動きが取れない因習を象徴しているようだ。

果ては『佐橋甚五郎』（大正二年）で、徳川家康の家臣らによる鉄砲の腕試しの賭けで、鷺は撃ち殺されてしまう。鷺外が典拠とした史料に鷺撃ちの場面はなく、創作とみられる（尾形尙『鷺外の歴史小説 史料と方法』筑摩書房、一九七九年）。

### 藩主の跡を追って

鷺外の墓は元々、現在の三鷹・禅林寺にあったわけではない。死去から四日後の大正十一年七月十三日、東京・向島の弘福寺に埋葬された。隅田川東岸の土手に隣接し、江戸風情が残る下町だ。

江戸時代以降の森家代々の墓は津和野・永明寺にある。にもかかわらず、なぜ向島の地に葬られたのか。それは明治二十九年に没した鷺外の父・静男にさかのぼる。鷺外の末弟・潤三郎は静男の墓所について「弘福寺としたのは藩主茲監公の墓所があるからで、以後此寺を菩提所と定めた」（郷土名家の墳墓（上）『墓蹟』第十一号、一九二八年）と記す。鷺外の次女・小堀杏奴も「墓所は父の希望により、向島の弘福寺に葬られた。（中略）父は森家が、先祖代々善政の恩恵を受け、心からの敬慕の情を抱くに至った藩主の御墓所近く眠りたかったのである」（『森鷺外文学紀行切支丹と亡父鷺外』『人と文学シリーズ 現代日本文学アルバム 森鷺外』学習研究社、一九七九年所収）と振り返



津和野町の乙雄山にある亀井家代々の墓所。右から十二代茲監、茲監の妻、十三代茲明の墓石



鷗外が撰んだ亀井茲監の功績が刻まれた石碑。左奥は茲監の墓石

る。  
亀井家代々の墓所も津和野・永明寺にあるが、参勤交代で江戸と国元を往復したためか、七〜十代目は東京・芝の青松寺に埋葬され、江戸と津和野の双方に墓があったとみられる。だが、維新後に東京に移り住み、十二代目茲監の妻以降、向

島の弘福寺に葬られるようになった（津和野町教育委員会『津和野町埋蔵文化財報告書第15集 津和野藩主亀井家墓所』二〇一一年）。菩提所を移した藩主の跡を追うように、森家も墓所を移したのだ。大正十一年の弘福寺には、森家当主では静男と林太郎（鷗外）、亀井家当主では茲監と十三代目茲明の墓があった。茲監が「正二位」に上った功績を刻んだ鷗外撰の石碑でもある。

### 関東大震災で被災

ところが、翌大正十二（一九二三）年九月一日の関東大震災によって、両家の墓のつながりは絶たれてしまう。弘福寺の本堂は全焼し、境内は復興に際して区画整理の対象となった。鷗外を慕い命日に墓参した作家の永井荷風は、大正十三（一九二四）年七月九日の日記に「弘福寺焼跡は一面の花畑となり、孔雀草、千日草、天竺葵など今をさかりと咲乱れたり。堂宇再建の様子もなし」と記した（永井壮吉『断腸亭日乗一』岩波書店、一九八〇年）。

大正十五（一九二六）年、亀井家は弘福寺の墓石を津和野に移した。これが現在の乙雄山にある茲監、茲明の墓である。森家の墓も翌昭和二（一九二七）年に、東京都内で同じ宗派の三鷹・禅林寺に改葬された。

三鷹や津和野を訪ねても、鷗外が死に臨んだ当時の状況は浮かんでこない。震災で引き裂かれるまでの僅かな期間

だったが、鷗外は自ら望んで旧藩主の傍らに眠っていたのである。

「石見人森林太郎として死せんと欲す」とは、近代国家に仕えた「官僚森林太郎」を捨て、「石見人森林太郎」として津和野藩主に仕える武士に戻ることを意識したのではないか。史伝で描いた至福の世界である。具体的に思い浮かべた土地は、旧藩主と森家の墓所があった向島となる。津和野出身の作家、伊東佐喜雄はふるさとに対する鷗外の意識を次のように考察する。

「出京後も、祖母や両親や師友・先輩ばかりではなく、旧藩主の亀井家、或ひは郷里から上るひとびと―それらの環境と雰囲気とは、鷗外にとつて、東京へ運ばれてきたふるさとの風土であらう。たとへ現実には回想はされなくとも、ふるさとの風土はたえず鷗外のなかで生きてゐた。(中略)

だが、回帰は徐々に、しかし確実に行はれた。はつきり云ふと、その速度は「洪江抽斎」前後にいちじるしく加はつてゐる。江戸末期を生きた儒学者とその生活へのひたすらな郷愁は、そのまま自分の魂の風土に対する望郷となつた。そして、回帰の針が安らかな頂点をさしたのは、実にかの死の床においてであつた(伊藤『森鷗外』大日本雄弁講談社、一九四四年)

ただし、臣下として向島の旧主君の側に眠るのであれば、

差し障ることがある。茲監の「正二位」追贈の石碑に記された「正三位勲一等」という鷗外の肩書は、選者の位が上がるほど、主君の功績を高める役割があろう。しかし、鷗外自身の墓石に刻むとなると話は別だ。十三代目茲明は三十六歳で早世したため、「従三位」「勲四等」と位階も勲位も鷗外よりかなり低い。十二代目茲監は「正二位」と位階は高いが、勲位は「勲三等」と鷗外より低くなる。鷗外が遺言でこだわった栄典拒否と「森林太郎墓の外一字もほる可らず」と念を押したことは、一体でなければならぬ。

### 向島・弘福寺

にもかかわらず、死の前日、鷗外の意志とは無関係に、政府は特旨を以て鷗外の位階を「従二位」へと一級上げた。茲監の墓石に記された追贈前の位階と並ぶこととなつた。ますます鷗外の墓に肩書を彫るわけにはいかなくなる。

鷗外の遺言と向島・弘福寺の関係を考察した論考は、管見の限りでは見当たらない。向島の地に森家と亀井家の墓の手掛かりは残されていないか。弘福寺に手紙を送つた上で、電話で尋ねた。だが、「全くないですね。震災で焼けてしまい、どこに何があつたのかわかりません」との話だつた。

そこで、実際に訪ねることにした。東武伊勢崎線の曳舟ひきかね駅で下車し、スマートフォンの地図検索を頼りに入り組ん



大正十一年に鷗外が埋葬された向島・弘福寺。本堂は翌年の関東大震災で被災し、現在のものは昭和八年に再建された＝東京都墨田区

だ路地を、隅田川東岸を目指して西へと歩く。すると、墨田区立言問小学校の裏手に「依田学海旧居跡」という金属製の史跡案内板が設置されているのを見つけた。

「森鷗外の師としても知られ、『キタ・セクスアリス』の中では文淵先生として登場。（中略）鷗外が15歳の頃の出会いだが、その後も二人の交流は続き、鷗外のドイツ留学に際しては、『送森軍医遊伯林序』という送別の漢詩を贈っている」

漢詩を学ぶため、この地に住んだ依田のもとに通っていたのだ。依田は帝室博物館総長兼内大臣秘書官長を務めた股野琢と学友で、鷗外が博物館総長の職を継いだ際、依田と股野の縁故を漢詩で詠じている。

その痕跡を横目に歩を進めると、弘福寺の山門に着いた。曳舟駅からおよそ十五分の道のりだった。

寺の入り口には、先ほどと同じ形の案内板が設置され、「淡島寒月旧居跡」と記される。江戸時代に大流行したせんべいの名店「淡島屋」を経営する大地主で、弘福寺寺内に隠居所を建てて住んだという。

門をくぐると、石畳の先に本堂が建つ。本堂右側に石亀に乗った石碑があり、寺の由来が記される。延宝元（一六七三）年に創建され、明治、大正期に改修、改築を重ね、「旧時の盛観」となった。ところが、大正十二年九月の関東大震災で灰燼に帰した。昭和三年から再建計画が始まり、昭

和八年に落慶したという。

本堂は隅田川東岸を背にして東を向き、本堂の右奥の北側に小さくまとまった墓地がたたずむ。入り口に三基の墓石が立ち、「墨田区登録史跡 池田冠山墓」の案内板が立つ。因幡国・若狭藩（現在の鳥取県若桜町周辺）の五代藩主だ。境内を見回しても、鷗外の墓の痕跡はおろか、かつてここにあったことを伝える案内板すらない。

亀井家の墓は三基あるが、いずれも昭和五十年代に建てられたものだ。津和野町教育委員会『津和野藩主亀井家墓所』によると、十三代目これら茲明の二男以下代々の墓だという。

現地に手掛かりがないため、図書館で古地図を探すことにした。何冊か手に取る中で、『古地図・現代図で歩く明治大正東京散歩 古地図ライブラリー別冊』（人文社、二〇〇三年）に、弘福寺の周辺図が墓地も含めて記されているのを見つけた。明治四十年に東京郵便局、東京通信管理局に編纂された「東京市十五区番地界入地図」に基づき書き起こした版だという。

当時の地図を見ると、本堂の位置は同じだが、向きが異なる。かつては入り口が隅田川東岸の下流、南側にあり、現在よりも長い参道の奥にある本堂は南側を向いていた。墓地は本堂裏の他、隅田川沿いの本堂左手、西側にも広がる。入り口の右手、東側にも墓地が広がるが、隣接する長命寺のものが弘福寺のものは判然としない。

明治初めに向島に移住した頃の様子は、鷗外の妹・小金井喜美子『鷗外の思い出』（岩波書店、一九九九年。初出は一九五五年）に記される。「亀井家のお墓所弘福寺」について、「御墓所は本堂の右手裏にありました」と記し、祖母と母が「もう国へ帰ることはあるまいから、内の墓所もここにしましょう」と話し合ったと回想している。当時の本堂の右手裏は、現在の本堂の右側手前で墓所の入り口付近だろうか。森家や亀井家の墓もこの辺りにあったと推察される。

大震災による区画整理前の墓地は現在より広がったとしても、隅田川の土手まで二、三十メートルしかない平坦で手狭な土地であったことには変わりない。山を隔てて藩主の墓所を仰ぎ見なければならぬ津和野・永明寺の森家の墓に比べ、両家の墓の距離はかなり近かったはずだ。向島の地に立ち、かつてあったはずの墓石を思い浮かべれば、「石見人」として死に望んだ意味がより鮮明になる。

墓めぐりを終えて隅田川東岸の堤防を登ると、一羽の鷗がゆったりと上空を舞っていた。中国山地の盆地に位置する津和野から瀬戸内海へ出て、船で上京する際に初めて鷗を見たであろう鷗外は、少年時代の向島、そして青年時代に欧州へ往復した船上でも、こうした光景を目にしたはずだ。雅号「鷗外」の由来には、杜甫の詩「柔艫じゅうくわ 輕鷗けいおうの外ほか」（輕い櫓を動かし、渚にあそぶ鷗の外に出てゆこうとする）



野口 武則（のぐち・たけのり）氏

1976年生まれ。中央大学法学部卒。2000年毎日新聞社に入社し、秋田支局、政治部、大阪社会部。代替わり取材班キャップ、政治部官邸キャップ、デスクを務め、現在は論説委員。著書に『元号戦記 近代日本、改元の深層』（角川新書）。共著に『靖国戦後秘史』（角川ソフィア文庫）、『令和 改元の舞台裏』（毎日新聞出版）。

や、隅田川にあった「かもの渡し」と呼ばれた船の渡し場の外など諸説ある。いずれにせよ、身は官僚として縛られたとしても、心はどこへでも飛んで行ける自由を求めたことだろう。

帰路は弘福寺から見上げる東京スカイツリーを目印に、東京メトロ押上駅を指した。南東へ五分ほど歩くと、都立本所高校の前に「森鷗外住居跡」の史跡板が設置されていた。

「所在地 向島三丁目  
三十七番・三十八番  
文久二年（一八六二）

現在の島根県津和野町に生まれた森鷗外（本名 林太郎）は、明治五年（一八七二）十歳の時に父静男に随い上京しました。初めに向島小梅村の旧津

和野藩主亀井家下屋敷、翌月からは屋敷近くの小梅村八七番の借地で暮らすようになり、翌年上京した家族とともに三年後には小梅村二三七番にあった三百坪の隠居所を購入して移り住みました。（中略）この向島の家のことを森家では「曳舟通りの家」と呼び、千住に転居する明治十二年まで暮らしました。

（中略）明治九年以後は寄宿舎生活となりましたが、曳舟通りの家には毎週帰り、時おり向島の依田学海邸を訪れて漢学の指導を受けていました。鷗外の代表作『渋江抽斎』には「わたくしは幼い頃向島小梅村に住んでいた」と記し、弘福寺や常泉寺などがある周辺の様子や人々についても詳しく書き残しています。また明治十年代に原稿用紙に用いたという「曳舟居士」の号は近くを流れていた曳舟川（現在の曳舟通り）にちなむものでした。鷗外にとって、向島小梅村周辺での生活は短いものですが、思い出深い地として記憶にとどめられていたようです。

平成二十六年二月

墨田区教育委員会

本所高校前のバス停の名称は「森鷗外住居跡」。鷗外が生きた痕跡と思い出が、今も向島の地に刻まれていた。国から与えられた官僚としての肩書きを捨てた「石見人森林太郎」の脳裏を、最後によぎったであろう土地である。

〈参考文献〉

目加田誠『新釈漢文大系 第19卷 唐詩選』明治書院、一九六四年

岡田正弘「鷗外という号について」(『鷗外』一四号、森鷗外記念会、一九七四年)

中井義幸「鷗外という号について」(『鷗外』一五号、森鷗外記念会、一九七四年)

陳生保『森鷗外の漢詩 上、下』明治書院、一九九三年  
監修山崎一穎、編集津和野町教育委員会『鷗外 津和野への回想』津和野町郷土館、一九九三年

山崎一穎『森鷗外 明治人の生き方』筑摩書房、二〇〇〇年

松島弘『亀井茲監 津和野ものがたり第10巻』津和野歴史シリーズ刊行会、二〇〇〇年

文中の鷗外作品と漢詩の読み下し文、現代語訳は『鷗外近代小説集 全六巻』(岩波書店、二〇一〇年代)、『鷗外歴史文学集 全十三巻』(岩波書店、二〇〇〇年代)から引用した。

完

本連載を基に加筆し、新たに年表などを加えた『宮内官僚 森鷗外(仮題)』が2025年初頭、角川新書より刊

行予定です。